

FormCopy と下位コピーの発音による透明的自由関係節の派生

平塚哲郎

1. 導入

透明的自由関係節(Transparent Free relative, TFR)では、太字で表す句(ピボット)が節の主要部のように振る舞う。まず、(1a)のような標準的な自由関係節(Standard Free relative, SFR)は *there* 構文で使用することができない。一方(1b, c)のように、TFR はピボットが不定名詞なら非文とはならないが、定名詞の場合は非文となる。

(1) a. * There is what you ordered on your desk.

b. There is what John might call **a banjo** on his desk.

c. * There is what John might call **his banjo** on his desk.

(Schelfhout et al. (2004: 2))

また、TFR では主節動詞とピボットがイディオムチャンクを形成していなくともイディオムの解釈を得ることができる。

(2) They didn't *make* what can reasonably be considered **headway**.

(Riemsdijk (2000: 4))

さらに、TFR 内部に埋め込まれた照応形が主節主語によって束縛されることが可能である。

(3) They_i live in what is often referred to as **each other_i's backyard**.

(Riemsdijk (2006a: 1691))

本論は、このような TFR の振る舞いに対して説明を与えることを目指す。具体的には、ピボットが主節と関係節内部の両方に存在し、両者が FormCopy (Chomsky (2021))を通じてコピー関係を得て、下位のピボットのコピーが発音されると主張する。

2. 先行研究とその問題点

本節では、先行研究として Ha (2012)と Grosu (2003, 2016)を概観する。Ha (2012)は主節に横方向移動したピボットに TFR が付加し、TFR 内のピボットが削除され上位のピボットのコピーが発音されると提案している。

(4) a. TFR : [what John might call [**a banjo**]_i]

b. 主節 : There is [**a banjo**]_i ← 横方向移動

(5) There is [[what John might call [~~a banjo~~]_i] [**a banjo**]_i]

しかし、この提案は TFR 内部の付加詞がピボットに後続する(6a)の語順を予測することができない。発音されるピボットは主節に横方向移動したピボットであるため、ピボットが文末に生起する(6b)を誤って派生する。

(6) a. I just saw what might well be taken for **a meteor** by naïve observers when visibility is rather poor.

(Grosu (2003: 288))

b. ??I just saw [[what might well be taken for ~~a meteor~~_i by naïve observers ...] [**a meteor**]_i].

Grosu (2003, 2016)は TFR と SFR は空の主要部 *e* と CP で構成される自由関係節であると主張している。さらに TFR においては、素性が未指定の *what* に対してピボットの素性が与えられると提案している。

(7) a. There is [_{DP} *e* [_{CP} what [_{singular, DP, ...}]_i John might call [_{ZP} ~~what~~ [_{singular, DP, ...}]_i **a banjo** [_{singular, DP, ...}]]] on his desk.

b. I am going to sell [_{DP} *e* [_{CP} what_i I bought ~~what~~]]

この提案は、(8b)の TFR のピボットからの抜き出しが可能である事実を説明することができない。

(8) a. * Who_i did you order what represented the sole possession of *t_i*?

(Riemsdijk (2006a: 1690))

b. Who_i did they copy what was identified as **a picture of *t_i***?

(Riemsdijk (2006b: 46))

SFR と TFR が同じ関係節の構造を持つならば、SFR からだけでなく、TFR からの抜き出しも複合名詞句制約 (Ross (1967))に違反するため不可能であるはずだが、実際は可能である。

3. 提案と分析

本論は主節と TFR 内部の両方にピボットがある(9)の構造を提案する。

(9) There is [_{DP} **a banjo**]_i [_{CP} what_i] John might call [_{ZP} ~~what~~ [_{singular, DP, ...}]_i **a banjo**]] on his desk.

(9)では、Grosu (2016)が仮定する小節や copula 節を表す ZP 指定部から *what* が CP 指定部に Internal Merge(IM)している。この CP が主節にある上位のピボット(*a banjo*₁)に付加する。また、Chomsky (2021)が提案する FormCopy(FC)によって *what*₂ と *a banjo*₂、および *a banjo*₁ と *what*₁ にコピー関係が与えられる。*a banjo*₁ と *a banjo*₂はどちらも *what* とコピー関係にあるため、間接的にコピー関係を得ている。

TFR の適切な語順を産出するには、上位ではなく下位のピボット(*a banjo*)が発音される必要がある。そのため、本論は「下位のコピーが LF と PF の両方において有標な解釈を持つ時、下位のコピーを発音することが可能である。」という Takano (1998: 865)の仮定を採用する。実際、TFR のピボットが **Emphatic Juncture(%)** と呼ばれる特殊な発音と解釈を持つことが Struman (2019)で観察されている。具体的にいうと、(10)に示す通り、ピボットは「%」で表記される部分にポーズが置かれて発音され、特に重要で注目すべき要素として解釈される。

(10) a. Allen poured what he calls **a % beergarita** at the party on Friday.

b. In what some folks call **a % silver tsunami**.

(Sturman (2019: 2492))

このように、下位のピボットが LF と PF の両方において有標な解釈を持つことから、上位ではなく下位のピボットを発音することができる。

この分析を用いて、TFR の特性に説明を与える。まず、(1b)は(11)の構造を持つ。不定名詞のピボット *a banjo* に CP が付加しているため、この TFR は不定性を有することとなる。よって *there* 構文で使用が可能となる。

(11) There is [DP **a-banjo**]_i [CP what_i John might call [ZP t_i **a banjo**]] on his desk.

第二に、(2)では主節動詞とピボットが表面的にはイディオムチャンクを形成していないが、本論の提案では(12)のように *make* と上位の *headway* がイディオムチャンクを形成している。そのためイディオムの解釈が可能となる。

(12) They didn't *make* [DP **headway**]_i [CP what_i can reasonably be considered [ZP t_i **headway**]]].

第三に、(3)は(13)に示す通り、ピボット *each other's backyard* が主節にもあるため、主節主語の *they* に同一節内で束縛される。

(13) They_i live in [DP [**each other's backyard**]]_j [CP what_j is often referred to [ZP t_j as [**each other's backyard**]]]].

さらに、先行研究が抱えていた問題点も解決可能である。本論の提案では、(14)に示す通りピボットは基底生成位置で発音されるため、TFR 内部の付加詞が後続しても語順に関する問題は起こらない。

(14) I just saw [DP **a-meteor**]_i [CP what_i might well [be taken [ZP t_i for **a meteor**]] by naïve observers....]].

また、ピボットからの抜き出しが可能であるという事実は、抜き出しが上位のピボットから起きると考えることで説明される。(15)に示す通り、上位のピボットは関係節 CP 外部にあるため、この抜き出しは複合名詞句制約に違反しない。

(15) Who_i did they copy [DP [**a picture of t_i**]] [CP what_j was identified [ZP t_j as [**a picture of t_j**]]]]?

4. 結論

本論は TFR のピボットが主節と関係節内の両方に存在しており、これらが FormCopy によってコピー関係を得た後、下位のピボットの LF と PF における有標性により、上位ではなく下位のピボットが発音されると提案した。これにより、*there* 構文における定性効果の欠如、イディオム解釈、照応形の束縛に関する事実に説明を与えた。また、先行研究にとって問題となっている語順やピボットからの抜き出しが可能であるという事実も説明が可能である。

参考文献

- Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where We Are Now, and Where Can We Hope to GO," *GENGO KENKYU (Journal of the Linguistic Society of Japan)* 160, 1-41. / Grosu, Alexander (2003) "A Unified Theory of 'Standard' and 'Transparent' Free Relatives," *Natural Language and Linguistic Theory* 21, 247-331. / Grosu, Alexander (2016) "The Semantics, Syntax, and Morphology of Transparent Free Relatives Revisited; a Comparison of Two Approaches," *Natural Language & Linguistic Theory* 34, 1245-1280. / Ha, Seungwan (2012) "A Sideward Movement Analysis of Transparent Free Relatives," *Korean Journal of Linguistics* 37, 737-756. / Riemsdijk, Henk van (2000) "Free Relatives Inside Out," *PASE Papers in Language Studies, Proceedings of the 8th Annual Conference of Polish Association for the study of English.* / Riemsdijk, Henk van (2006a) "Free Relatives," *The Blackwell Companion to Syntax Vol. II*, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 338-382, Blackwell, Oxford. / Ross, John R. (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT. / Schelfhout, Carla, Peter-Amo Coppens and Nelleke Oostdijk (2004) "Transparent Free Relatives," *Proceedings of CONSOLE XII.* / Sturman, Bethany (2019) "The Emphatic Juncture: A novel Use of the IP boundary in English," *Proceedings of the 19th International Congress of Phonetic Sciences*, 2489-2493. / Takano, Yuji (1998) "Object Shift and Scrambling," *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 817-889.